

3 共同研究校における実践事例

(1) A中学校の取組（平成30年度の取組より） ―中学3年生に注目して―

A中学校では、7月に実施した意識調査の結果（表1）をもとに、2学期以降の取組目標について話し合いました。

3年生の結果では、「ア 当てはまる」だけに着目すると、「1 学校が楽しい」が47%、「2 みんなで何かをするのは楽しい」が50%、「3 授業に主体的に取り組んでいる」が30%、「4 授業がよくわかる」が22%でした。

表1 A中学校意識調査結果(1学期末)

調査項目	回答	1年	2年	3年	全体
1 学校が楽しい	ア 当てはまる	58%	33%	47%	46%
	イ どちらかといえば、当てはまる	36%	47%	39%	41%
	ウ どちらかといえば、当てはまらない	5%	13%	9%	9%
	エ 当てはまらない	1%	7%	4%	4%
2 みんなで何かをするのは楽しい	ア 当てはまる	68%	46%	50%	54%
	イ どちらかといえば、当てはまる	29%	43%	41%	38%
	ウ どちらかといえば、当てはまらない	2%	6%	7%	5%
	エ 当てはまらない	1%	5%	2%	3%
3 授業に主体的に取り組んでいる	ア 当てはまる	44%	36%	30%	36%
	イ どちらかといえば、当てはまる	48%	48%	55%	51%
	ウ どちらかといえば、当てはまらない	8%	11%	12%	11%
	エ 当てはまらない	0%	5%	2%	2%
4 授業がよくわかる	ア 当てはまる	35%	32%	22%	29%
	イ どちらかといえば、当てはまる	56%	49%	49%	51%
	ウ どちらかといえば、当てはまらない	8%	13%	23%	15%
	エ 当てはまらない	2%	6%	6%	5%

そこで、来年度の進路実現に向け、「自分で考え、表現できる」生徒の育成を目指し、取組目標を「4 授業がよくわかる」に決めるとともに、「ア 当てはまる」を選択する生徒数が増える実践を目指しました。そして、目標達成のために「考える時間をつくり、質問や発表につなげる」「意見を共有する時間をつくる」「スモールステップで学習を組み立てる」等に取り組むことにしました。

各授業において、生徒が自由に質問し合える「質問の時間」を設定しました（図5）。結果、この活動を通して、質問する生徒の疑問が解消されるだけでなく、答える生徒の理解も深まりました。また、授業中に質問できない生徒には、用紙に記入して教員に質問できるように配慮しました。この取組により、「生徒の躓きがわかり、授業改善に繋げやすくなった」「質問しやすい雰囲気ができ、授業の雰囲気がよくなった」「積極的に手を挙げて質問する生徒が増えた」などの成果が現れました。

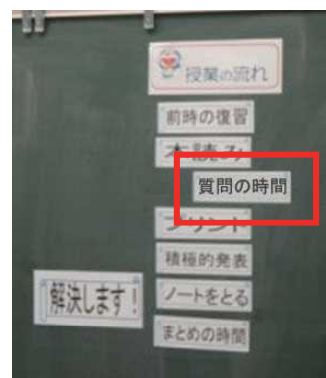


図5 「質問の時間」の設定(板書より)

また、ペアやグループなどによる協働学習の場を積極的に取り入れました。このことにより、主体的に学ぶ姿が多く見られるようになり、生徒からは、「協力して問題を解くことができて嬉しかった」「他の子の考えを知ることができて参考になった」「自分が思いつかないような考えを知ることができた」などの感想が聞かれました。これはまさに、「生徒の主体的な取組による互いが認め合う場面の実現」であり、「絆づくり」の礎となる取組になりました。教職員からは、「自分で考えた



グループによる協働学習の様子

り、友だちと相談する時間をとったりすることで、今までよりも問題に向き合おうとす

る姿がみられた」「友だちと教えあい『わかる』を実感できると『楽しい』と思えるようになり、さらに頑張ろうとする気持ちが出てきた」などの感想が聞かれました。

年度末の調査結果(図6)では、「4 授業がよくわかる」の項目で、「ア 当てはまる」と回答した生徒の割合が、22%から35%に増えました。また、他の項目においても1学期と比べ、「ア 当てはまる」と回答した生徒の割合が増えています。継続的な取組の成果が、多くの生徒に浸透していることが分かります。

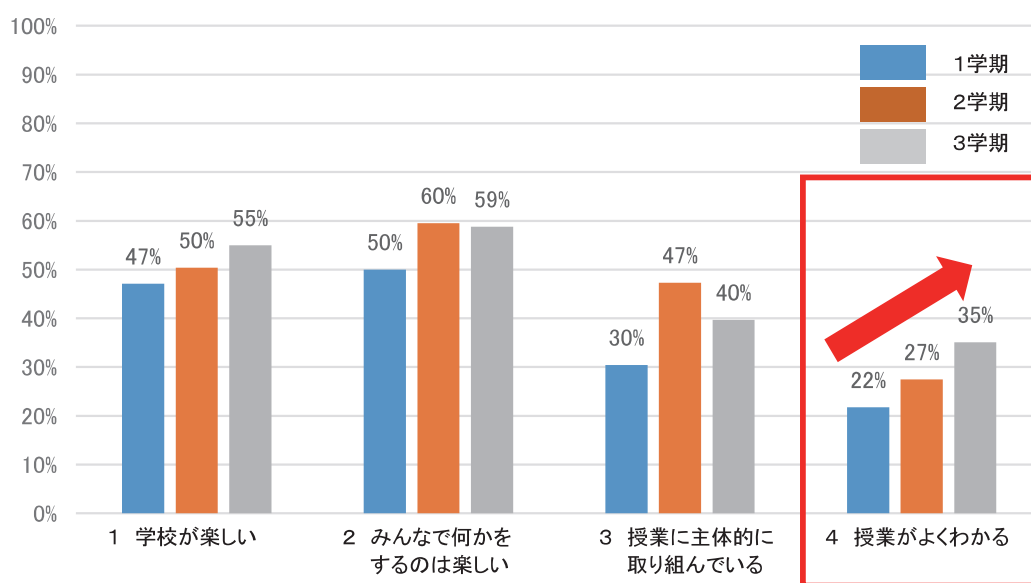


図6 A中学校3年生の意識調査で「ア 当てはまる」と回答した生徒の割合

A中学校では、未然防止と同時に不登校の初期対応にも積極的に取り組みました。7月末の時点で10日以上欠席している生徒をグラフ(図7)に表し、不登校の実態を的確に把握しながら次学期からの支援の方向性を確認しました。特に、新たに名前があがった生徒に対しては、積極的な声かけや登校時における温かな雰囲気での受け入れにより、2学期末から年度末にかけて徐々に出席日数が増え(2月は授業日数19日のうち12日の出席、3月は授業日数6日のうち5日の出席)、進学に向けての意欲も高まりました。そして、卒業式には笑顔で参加することができました。

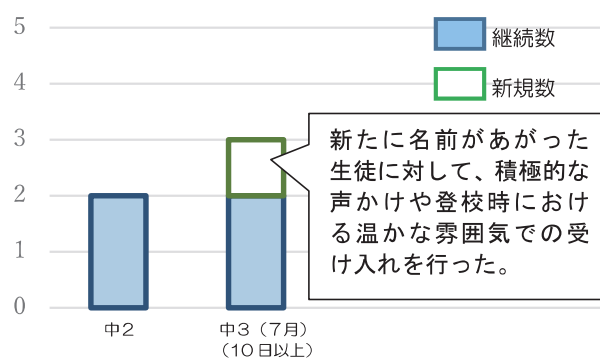


図7 A中学校3年生の欠席日数調査(1学期末時点)

(2) B中学校の取組（令和元年度の取組より）－授業のUD化と学力向上の視点を取り入れて－

B中学校は、7月に実施した意識調査の結果（表2）をもとに話し合い、学習内容の定着にも課題があることから、「4 授業がよくわかる」を2学期における全学年統一の取組目標に設定し、「確かな学力を育むための校内授業研究を通して、楽しさを味わえるような授業の構築」を目指しました。

表2 B中学校意識調査結果（1学期末）

調査項目	回答	1年	2年	3年	全体
1 学校が楽しい	ア 当てはまる	89%	50%	28%	56%
	イ どちらかといえば、当てはまる	11%	30%	56%	32%
	ウ どちらかといえば、当てはまらない	0%	20%	6%	9%
	エ 当てはまらない	0%	0%	11%	4%
2 みんなで何かをするのは楽しい	ア 当てはまる	95%	45%	28%	56%
	イ どちらかといえば、当てはまる	5%	45%	50%	33%
	ウ どちらかといえば、当てはまらない	0%	10%	11%	7%
	エ 当てはまらない	0%	0%	11%	4%
3 授業に主体的に取り組んでいる	ア 当てはまる	74%	60%	6%	47%
	イ どちらかといえば、当てはまる	26%	40%	61%	42%
	ウ どちらかといえば、当てはまらない	0%	0%	22%	7%
	エ 当てはまらない	0%	0%	11%	4%
4 授業がよくわかる	ア 当てはまる	68%	30%	6%	35%
	イ どちらかといえば、当てはまる	32%	65%	61%	53%
	ウ どちらかといえば、当てはまらない	0%	5%	28%	11%
	エ 当てはまらない	0%	0%	6%	2%

そこで、共同研究地域が推進している「授業のユニバーサルデザイン化（UD化）の視点（表3）」を取り入れるとともに、「学力向上の視点（表4）」も取り入れた授業を目指して授業改善に取り組みました。「学力向上の視点」は、「全国学力・学習状況調査」結果より生徒の課題を導き出し、4つの項目にまとめたものです。

表3 授業のUD化の視点

UDの視点	観点
①導入・展開の工夫	課題の明確化、教材提示、見通しのもとせ方、集中の持続
②指示・発問の工夫	具体的な言葉、明確な指示、働きかけ、モデル提示
③板書の工夫	見やすさ、流れ、文字の大きさ、色
④机間指導の工夫	声かけ、動き方、観察
⑤学習展開の工夫	リズム、時間配分、個人の活動、ペアワーク、グループ討議、教材の提供
⑥教室・学習環境の工夫	座席、前面掲示、刺激量の調整、整理整頓、物の置き方、場づくり、学習ルール
⑦視覚支援の工夫	提示物の工夫、具体物の活用、ICTの活用
⑧個別への配慮	補助教材の工夫、教材の活用、選べる課題・支援、個に対する支援

表4 学力向上の視点

①	複数の情報から必要なことを子ども自身が取り出す場面の設定
②	前に学んだことと結び付けて考える場面の設定
③	学習場面の状況を理解したり判断したりする機会を設ける
④	理由や根拠などをもとに、自分の考えを説明する活動を取り入れる

図8は、上記の視点を取り入れた指導案です。この場面では、指示・発問（②）、机間指導（④）、学習展開（⑤）を工夫して授業のUD化を図るとともに、「複数の情報から必要なことを子ども自身が取り出す場面の設定（①）」をしたり、「理由や根拠などをもとに、自分の考えを説明する活動（④）」を取り入れたりしながら「よくわかる授業」を目指しました。



授業の様子

本時の展開			
	学習活動 予想される生徒の反応	指導上の留意点	UDの視点 学力向上の視点
	カカオの実→実の虫食→カカオ豆	わかった生徒はすぐ	①本時の学習内容に
展開	○複数の資料から資料を選択し、モノカルチャー経済の問題点を考える（個人） ○個人で考えた問題点を班ごとに話し合い、さらに考えを深めてまとめる（グループワーク） ○班でまとめた問題点をホワイトボードに書き、前に掲示して発表する A：収穫量や採掘量が減少する可能性がある A：価格変動により収入が不安定になる	○複数の資料を用いて、もしいことを伝える ○ホワイトボードにどの資料を用いたかを記入させる	②指示の工夫（モデル提示） ④机間指導により、思考の状況を見て資料の分析を一緒に行う ⑤個人の活動とグループワークの活動を分ける ① ④

図8 授業のUD化及び学力向上の視点を取り入れた指導案

表5 B中学校意識調査の項目「4 授業がよくわかる」における結果（1・2学期末）

調査項目	回答	1年		2年		3年		全体	
		1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期
4 授業がよくわかる	ア 当てはまる	68%	39%	30%	29%	6%	22%	35%	30%
	イ どちらかといえば、当てはまる	32%	61%	65%	52%	61%	67%	53%	60%
	ウ どちらかといえば、当てはまらない	0%	0%	5%	19%	28%	6%	11%	9%
	エ 当てはまらない	0%	0%	0%	0%	6%	6%	2%	2%

表5は、B中学校意識調査の項目「4 授業がよくわかる」における結果です。1学期と2学期を比較すると、「ア 当てはまる」と回答した生徒の割合は、1年生は29%の減少、2年生は1%の減少、3年生は16%の増加となりました。そこで、この結果をもとに全ての教職員で検証を行いました。1年生においては、もともと高い値ではあったものの数値が下がった要因として、「学習内容が難しくなったうえに量も増え、生徒が十分に理解できていないまま学習を進めていたのではないかと」考察し、3学期からは、「朝の学習会の継続」「授業進行の見直し」等を具体的な取組として設定しました。3年生においては、数値が上がった要因として、「スモールステップの授業展開を意識したことが、生徒の確実な理解に繋がったのではないかと」考察し、引き続き3学期も分かりやすい授業を目指すことにしました。また、「ウ どちらかといえば、当てはまらない」「エ 当てはまらない」と否定的に回答した生徒に着目すると、2年生は14%増加しましたが、3年生は22%減少しました。

さらに、3年生においては、「2 みんなで何かをするのは楽しい」の項目についても「ア 当てはまる」と回答した生徒の割合が28%から44%に増え、「3 授業に主体的に取り組んでいる」の項目についても6%から17%に増えました。グループでの学習や話し合い活動など、他の子とのかかわりが楽しくなり、主体的に学ぼうとする意欲も高まったと考えられます。



教職員研修の様子